## 祇園祭について

鎌倉末期頃に雨櫻神社の社殿が焼失した際、御神体は六所神社へ遷（うつ）られ、応永五年（一三九八）に現在の雨櫻神社の地に社殿が再建され再び戻られた。このことから遷座していた雨櫻神社の神様が報賽（ほうさい）（お礼）の意を持ち、一年に一回の神幸祭が始まったとされる。旧暦の六月七日より十四日とされていたが、現在は七月七日を含む日曜日から日曜日の八日七晩執り行う事となっている。毎日のお祭りにて小麦入りの「おこわ」が各家より奉納され、化粧日と呼ばれる五日目には氏子崇敬者の手により注連縄や紙手が新たにされる。七日目の夜には「獅楽式（しがくしき）」や「御獅楽（おしがく）」と呼ばれる獅子舞が、中村家庭前にて舞われ、八日目（還御日）には毎年流鏑馬が行われていた。神輿行列は百名以上の人々の奉仕があり、江戸時代にはその重要さと遠近より多くの参拝者が来訪するために、掛川藩から警固の武士が派遣されていたと伝わる。

## 流鏑馬神事と獅楽式について

古来垂木の里には深山渓谷があり、怪獣（大獅子）が生息していたと伝わる。ある初夏、小麦の取入れ時に怪獣が中村彦八庭前に至り、小麦俵を食い破り暴れ回った。尾崎宮（六所神社）の神主深く憂い、怪獣を追い払う為、神に祈り武者を募ると、獲物具足を身に着け馬に跨り馳せ参じた小柳津六郎衛門を筆頭に七騎の武者が集い、怪獣を追い深山に分け入り遂に射留める。諸人は再びこの事態が起こらない様に、この地に怪獣を埋納し諸神を祭りて祈る事とした。

この由来により七日目の夜に、六所神社神主や獅子頭役達が中村家庭前に至り「獅楽式（しがくしき）」を執り行う。八日目（還御日）には、怪獣退治の家々より、衣装を身に付けた若武者と供回りが六所神社を目指し、大杉の前にて会する。この後、古式に則り、怪獣を追い詰めるように、二手に分かれて馬場の原に向う。南端にて射的を行い並方して馬を走らしていたが、後世に至り流鏑馬の形となったと伝わる。財政事情の悪化により戦後一時期中断されたが、伝統保持のため近年には数年毎に行うようになった。

### 祇園祭行事予定

| | | |
|---|---|---|
| ７月１日 | | 月次祭　清祓（雨櫻神社） |
| １日目 | 午後２時 | 御神幸祭（雨櫻神社） |
| | | 神幸行列の休憩（馬場） |
| | 到着後 | 着輿祭（六所神社） |
| ２日目 | 正午 | 日供祭（六所神社） |
| ３日目 | 正午 | 日供祭（六所神社） |
| ４日目 | 正午 | 日供祭（六所神社） |
| ５日目 | 正午 | 日供祭（六所神社）　※化粧日 |
| ６日目 | 正午 | 日供祭（六所神社） |
| ７日目 | 正午 | 日供祭（六所神社） |
| | 午後７時 | 獅楽式（六所神社・中村家） |
| ８日目 | 午後２時 | 発輿祭（六所神社） |
| | | 流鏑馬神事（馬場） |
| | 到着後 | 還御祭（雨櫻神社） |

※流鏑馬神事は数年毎の開催となります

流鏑馬

獅子頭

神輿渡御

平成二十五年祇園祭の様子

流鏑馬騎手

戦前の祇園祭の様子